The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	芥川龍之介『虱』論 : 同時代の政治家への苦言
Author(s)	水野, 亜紀子
Citation	日本語・日本文化. 2024, 51, p. 87-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95215
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

芥川龍之介『虱』論
―同時代の政治家への苦言―

水野　亜紀子

1. はじめに

芥川龍之介『虱』（1916 年 5 月『希望』）[1] は歴史小説の一つである。本論は、『虱』を例にとりながら、芥川が作家として活動を始めた早い時期から、歴史小説の中に、すぐにそれとはわからない形で自己の政治思想を落とし込んでいた可能性について述べるものである。『虱』の設定や表記には、どのように考えても不自然な点がある。それらへの着目から始めて一編の分析を行うことで、芥川の歴史小説の可能性について述べたい。

『虱』の舞台は 1864 年の第一次長州征伐である。加賀藩にとって第一次長州征伐への参加は、汚名返上の意味を持っていた [2]。それは京都で起きた禁門の変と前田慶寧の無断退京があったからである。幕末、会津藩や薩摩藩を中心とした禁裏御門を警護する軍勢と、上洛した長州藩兵が激突した。この時、前田慶寧が幕府から京都警護を任命されていたが、慶寧は無断で京都を離れたため、幕府から処分を受けた。そのことがあったため、幕府が長州藩を征討するための軍を組織した時に、加賀藩は積極的に参加を願い出たという。その申し出は却下されたが、最後には参加を認められることとなった。

こうした一連の流れをみても、加賀藩にとって長州征伐は重い意味を持つことがわかるだろう。その長州征伐を題材とした『虱』が、史実とはうらはらにユーモラスに描かれることで、諧謔を含むことは明らかだ。加賀藩士が汚名返上を行おうとする大切な場面で虱が話題となり、長州征伐に向かう姿は戯画化されているのである。『虱』の主題を論じる先行研究はいずれも、『虱』がユーモアや皮肉を含むものであることを指摘している。論者もそれに賛成する。しかし、先行研

究では、ユーモアや皮肉が向けられる対象が、人間一般[3]、『虱』の舞台となっている幕末の思想[4]、『虱』が執筆された当時やその少し前の社会に対してなどであると考えられてきた[5]。

本論はそれらの読みを認めたうえで、実は『虱』がある特定の政治的事件を扱っており、それに対する痛烈な批判を表現したものだと捉えることができる作品であることを主張する。つまり、『虱』が人間という存在の営みに対する諧謔を含むだけでなく、また社会全般への批判を行うだけでもないことを指摘したいのである。論者の考えでは、『虱』は発表時とごく近い時期に実際に起きた、ある政治的事件を取り上げているとみることができるような仕掛けを持つ[6]。

ここからはその仕掛けについて説明していくが、まずは事実の改変・隠蔽という視点から迫っていきたい。『虱』は、後述するように、史実を確認して書かれたようであるが、それにしては不自然な設定となっているのである。

2. 改変と隠蔽

『虱』には材源があることがわかっている。芥川が書いた「校正の后に」によると、「加州藩の古老に聞いた話」であるという[7]。

人から聞いた話をもとに『虱』を執筆したというが、芥川は後から長州征伐にまつわる史実を確認したと思われる。それは、日付の「元治元年十一月二十六日」や、人名の「佃久太夫」「山岸三十郎」など、正確な情報が作中に持ち込まれているからである。鷲﨑秀一は『加賀藩史料』に書かれる人物名、出兵準備の様子などに着目し、「細部に至るまで精巧に作られていたとなると、やはり「加賀藩の古老」経由で、旧藩書類に触れていたと考えるほうが妥当である」としている[8]。

しかし、事実関係を調べて執筆されたにしては、どうも不可解な点がある。史実と比較すると、『虱』には見過ごせないような大きな改変と隠蔽があるのである。『虱』には次のようにある。

> 元治元年十一月二十六日、京都守護の任に当つてゐた、加州家の同勢は、折からの長州征伐に加はる為、国家老の長大隅守を大将にして、大阪の安治川

口から、船を出した。小頭は、佃久太夫、山岸三十郎の二人で、佃組の船には白幟、山岸組の船には赤幟が立つてゐる。五百石積の金毘羅船が、皆それぞれ、紅白の幟を風にひるがへして、川口を海へのり出した時の景色は、如何にも勇ましいものだつたさうである。

ここからわかるように、作中には、五百石積の金毘羅船 2 艘だけが登場する。「小頭は、佃久太夫、山岸三十郎の二人」「紅白の幟を風にひるがへして」とあることから、長州征伐に参加する全体のうちの 2 艘だけに焦点を当てているのではなく、2 艘しか出航していないという設定をとっている。しかし、実際は、22 艘の金毘羅船と「発機丸」で出航している。「発機丸」とは、軍艦である。『加賀藩史』には次のようにある[9)]。

同廿九日払暁大坂え上陸し、北天満興正寺を宿営とす。且惣勢の内公に随ひて発機丸異国造蒸気船（注・「異国造蒸気船」の部分は分ち書き）に乗組べき人数百五十余人。其外徒卒・小人已下都而於安治川渡海船へ乗船す。都而二拾二艘なり。先是廿五日より数日間、組衆を初として附属の諸隊も亦安治川に乗船して出航の令を待、都て四千余員なり。

「安治川渡海船」は金毘羅船のことである。引用に用いた史料はもちろん芥川が直接みたものではないが、この引用から、実際には加賀藩士とその他大勢は、「発機丸」と金毘羅船 22 艘で長州征伐へ向かったことがわかる。日付や人物名が正確に作中に取り込まれる一方で、『虱』の設定が実際とは異なることが確認できる[10)]。

それにしても、軍艦の存在が見落とされることなど、あるのだろうか。そもそも加賀藩の保有する「発機丸」とはどのような軍艦であろうか。田畑勉によると、「1858 年に建造された「英国新製」の「至極宜」新鋭艦」であった。「加賀藩で「発機丸」と名付けた。「鉄製」の艦体は全長 27 間（48.6 メートル）、幅 4 間（7.2 メートル）、総トン数 250 トンあり、75 馬力の蒸気動力を備える」とのことである[11)]。加賀藩がこの洋式軍艦を購入したのは 1862 年である。その 2 年

後に第一次長州征伐を迎える。

徳田寿秋は『加賀藩史料』を参照して長州征伐に向かう際の「発機丸」の様子についてまとめるが、そこからは、「発機丸」が幕府の要請に従って活用されていたことがわかる。少し長くなるが引用する[12)]。

> まず発機丸は、いち早く長州に軍を送る役目を担った隣の越前藩のために貸し出されることとなり、艦将であった岡田（注・雄次郎）は発機丸を大坂に回送、越前藩の要望に応え、豊前（福岡県）まで航海し、大坂に帰ったが、その後、藩老長連恭（大隈守）が率いる藩兵の輸送に当たる。京都の宿営建仁寺に勢揃いした五八〇余名の加賀藩の征長軍が出陣したのは十一月二十八日。伏見から淀川を下り、翌日の明け方に大坂に到着、北天満の興正寺を宿営とした。総勢の内の一五〇人余りが藩老長連恭に従って発機丸に乗り込むことになり、他は四千人ほどに膨れ上がった軍勢とともに安治川渡海船に乗り込み、十二月四日に長州にむかった。一方、天保山沖で待つ岡田が率いる発機丸は、五日に荷物を積み込み、藩老長連恭らを待ったが風波高く、予定が伸びて七日明け方に長らは興正寺を出立、淀屋橋爪で小船に乗り、その後発機丸に乗り込み出港した。

この説明からもわかるように、「発機丸」は他の藩のためにも動き、連日活用されていた。『虱』に正確な日付や人名を取り込んだ芥川は、その事実を把握していたに違いない。それにもかかわらず『虱』で「発機丸」に全く触れられていないのは不自然ではないだろうか。『虱』には 2 艘の金比羅船が登場するが、作中では 2 艘のうち 1 艘の様子しか描かれない。1 艘しか描かれないのであれば、その 1 艘は「発機丸」でもよいはずである。加賀藩が長州征伐への参加を許されたのは、「発機丸」があったからだとさえいえるのであるから、『虱』が「発機丸」の存在をなかったこととし、22 艘の金毘羅船を 2 艘としていることは、やはり不自然である。

ちなみに、この操作にともなって、『虱』に登場する加賀藩士の人数もかなり減らされている。『虱』には「第一どの船にも、一艘に、主従三十四人、船頭四

人、併せて三十八人づつ乗組んでゐる」とある。船頭を除き、加賀藩士は合計68 名である。しかし実際には、「発機丸」に乗った加賀藩士は約 150 名、長州征伐に参加した加賀藩士は全体で約 580 名、その他の人々を含めると総勢は約4000 名であったという。先にも同じ箇所を引用したが、ここでは人数に注目して再び『加賀藩史』を引用する[13)]。

> 同廿九日払暁大坂え上陸し、北天満興正寺を宿営とす。且惣勢の内公に随ひて発機丸異国造蒸気船（注・「異国造蒸気船」の部分は分ち書き）に乗組べき人数百五十余人。其外徒卒・小人已下都而於安治川渡海船へ乗船す。都而二拾二艘なり。先是廿五日より数日間、組衆を初として附属の諸隊も亦安治川に乗船して出航の令を待、都て四千余員なり。

当時の加賀藩の動向をまとめた徳田寿秋の説明も次に引用する[14)]。

> 京都の宿営建仁寺に勢揃いした五八〇余名の加賀藩の征長軍が出陣したのは十一月二十八日。伏見から淀川を下り、翌日の明け方に大坂に到着、北天満の興正寺を宿営とした。総勢の内の一五〇人余りが藩老長連恭に従って発機丸に乗り込むことになり、他は四千人ほどに膨れ上がった軍勢とともに安治川渡海船に乗り込み、十二月四日に長州にむかった。

これらの引用から、『虱』では加賀藩士の人数が減らされていることがわかるだろう。船の数を減らした結果とはいえ、長州征伐とは思えないほど少人数となっている。

『虱』には加賀藩の出航の様子を「如何にも勇ましいものだつたさうである」と述べる箇所がある。あえて史実よりも少ない数の船と武士を登場させることで、状況との落差がユーモアを生み出すのは確かである。しかしこの矮小化は、歴史に対する理解が不足していると読み手に思わせてしまうような操作であり、正確な日付や人名を作中に書き込む行為と矛盾している。はたして、ユーモアを生み出すためだけにこの矮小化は行われたのであろうか。そこで軍艦「発機丸」

の存在が隠され、船が 2 艘とされた理由を、作品の展開と関連付けながら探った。この操作にはユーモアを生み出すこと以外に何か意味があるはずである。結論を先に述べると、この操作を行って初めて本作にはある〈構図〉が成立する。その〈構図〉が本作には必要だったのではないか。ある〈構図〉とはどのようなものだろうか。またそれは作中でどのような役割を果たすのだろうか。

3. 用意された〈構図〉

前章で述べた〈構図〉について考えるため、まずは『虱』のあらすじについて述べる。舞台は長州征伐に向かう金毘羅船 2 艘（佃組・山岸組）のうち、佃組の船内である。どちらの船にも虱がたくさん発生した。侍たちは体を虱に食われないよう、暇さえあれば虱狩りをした。佃組の中老の森は、体が痒いのにすましている。またそれだけではなく虱を懐に入れて大事に飼っている。虱に刺されるおかげで、掻くうちに体が温かくなり、風邪をひかず、寝付きも良いという。そのうちに森をまねて虱を飼う者が出てきた。虱をとって食べる御徒士の井上は、森に反対する。「何処の国、何時の世でも、Précurseur の説が、そのまま何人にも容れられると云ふ事は滅多にない。船中にも、森の虱論に反対する、Pharisien が大勢ゐた」とあるように、井上のごとく虱をとって食べる者はいないが、森の説に反対して井上に加担する者が出てくる。こうして佃組の船内が森グループと井上グループに分かれた。井上グループは孝経を引いて、父母からもらった体を虱に食わせるのは不孝だと主張する。井上グループと森グループの間には時折口論が起きたが、ある日、森がとっておいた虱を井上が食べたことで、刃傷沙汰に発展する。あらすじは以上である。作中の人間関係を図示すると、次のようになる。

佃組　内部分裂する

【森グループ】Précurseur・改革派（虱を飼う）

【井上グループ】Pharisien・非改革派（虱を狩る・井上は食べる）

山岸組　内部分裂しない（虱を狩る）

注目したいのは、2 艘の金毘羅船で長州征伐をするということ自体が虚構であるにもかかわらず、作中では 2 艘のうち佃組 1 艘にしか焦点を当てない点である。佃組の内部分裂した様子はくわしく描かれるが、山岸組には全く触れられない。山岸組に何も事件が起きないという設定であるならば、初めから山岸組は登場させなくてもよさそうなものである。これは、船が 2 艘であることと、2 艘のうちの 1 艘で分裂事件が起きたことが、『虱』に必要な設定であったことを示す。

2 艘の船の関係性について考えるうえで、作中にはヒントとなる情報が1つある。本文に「佃組の船には白幟、山岸組の船には赤幟が立つてゐる」や「五百石積の金毘羅船が、皆それぞれ、紅白の幟を風にひるがへして」とあるように、2 艘の船には「紅白の幟」がつけられているのである。これは、源氏の白旗、平家の赤旗を連想させ、2 艘の船がライバル同士であることを暗示する。もちろん「紅白の幟」は虚構である。

『虱』では 2 艘の船はライバル関係であり、そのうちの 1 艘は分裂事件を起こしている。この〈構図〉の意味に迫るためにも、次はこの作品がそもそもなぜ虱を扱うのかという点について考えたい。芥川は「古老に聞いた話」を素材として『虱』を書いたという。そもそも「古老に聞いた話」の内容はどこにも明かされていないため、そこに虱がどのように関わるか不明であるが、「古老に聞いた話」を素材としたことだけが虱を取り上げた理由なのだろうか。作中での虱の機能に目を向け、虱が扱われることの意味を積極的に考えたい。『虱』が執筆された時代背景に目を向けると、1914 年、東京では虱が原因で発疹チフスが大流行している。渡部幹夫によると、日本で 7309 名が発症し、東京では 4119 名が罹患、778 名が死亡したという。その原因は季節労働者の貧困と居住状態であったと考えられている。それまでは地方病として存在していた発疹熱の病原体を有した虱が、季節労働者と共に東京に入ってきたのである[15)]。

芥川の『虱』は、東京で発疹チフスが大流行した 2 年後の 1916 年に発表されたものである。その意味で、『虱』というタイトルや、『虱』に登場する虱は、『虱』が発表された同時代を意識するよう指し示すものであった可能性がある。虱といえば一般的に忌み嫌われるものとして扱われるが、当時は特に、病原体の媒介としてのイメージと結び付いていたようだ。

では、虱が当時の人々にとって、ごく最近起きた出来事を思い出させるものであったとして、虱は『虱』作中では何を暗示するだろうか。端的に述べると、『虱』は、その執筆をさかのぼること 3 年ほど前に起きた第一次護憲運動を取り上げており、船中に大量に発生している虱は、藩閥政治家や藩閥政治家の影響力を示しているのではないかと考える。『虱』が第一次護憲運動を取り上げているとみた場合、次のような対応関係を指摘することができる。

長州征伐＝第一次護憲運動
2 艘の金毘羅船＝ 2 つの政党（立憲国民党・立憲政友会）
紅白の幟＝ライバル関係
船中の人々＝政党政治家
虱＝藩閥政治家や藩閥政治家の影響力

先に、あらすじをもとにして作中の人間関係を図示し、『虱』に用意された〈構図〉について説明した。そこにこの対応関係を当てはめると次のようになる。

佃組　内部分裂する
【森グループ】Précurseur・改革派（虱を飼う）
【井上グループ】Pharisien・非改革派（虱を狩る・井上は食べる）

山岸組　内部分裂しない（虱を狩る）

⇩

立憲国民党　内部分裂する
【改革派】（藩閥政府との妥協を図る）
【非改革派】（藩閥政府と対立する）

立憲政友会　内部分裂しない（藩閥政府と対立する）

虱は人々から忌み嫌われるものであり、悪影響を及ぼすものであり、広く蔓延するものである。ここでは、虱を藩閥政治家やその影響力を暗示するものであると考える。そして、佃組は立憲国民党に相当し、山岸組は立憲政友会に相当すると考える。立憲政友会と立憲国民党は、日本で政党政治を目指した 2 党である。この 2 党は藩閥政治を打破するために行動を起こしたのであるが、『虱』は第一次護憲運動をめぐるこの 2 党の政治的動向、特に立憲国民党の内部分裂を取り上げているのではないか[16)]。

日本が政党政治を目指した歴史を概観すると、1898 年に大隈重信と板垣退助が「憲政党」による最初の政党内閣、隈板内閣を組織した。しかしこれは本格的なものではなかった。1900 年になると、伊藤博文が立憲政友会を作って内閣を組織した。しかしこれも本格的な政党内閣とはいえなかった。大正時代に入り、護憲運動や民主主義を求める動きが高まると、1918 年、原敬が最初の本格的な政党内閣を組織する。この流れの中で、第一次護憲運動とは、長州閥の桂太郎内閣を退陣させる運動を指す。

1912 年 12 月 5 日、二個師団増設問題で第二次西園寺内閣が総辞職すると、21 日、桂太郎が第三次内閣を組織した。桂太郎は長州出身の陸軍軍人であり、山県有朋の後継者でもある。そのため、旧来の政治体制からの変革を期待していた言論界や民衆からは批判が集中した。そのような中、「閥族打破・憲政擁護」のスローガンのもとで、憲政擁護会を中心とする諸団体の大会が各地で開催される。1912 年 12 月 27 日、憲政擁護連合会が結成されると、立憲政友会と立憲国民党がこれに参加した。桂太郎は「立憲同志会」の結成を目指してそれらの動きに対抗したが、内閣不信任案に賛成する民衆に議会を包囲され、1913 年 2 月 11 日、桂太郎内閣は総辞職する。

このように、立憲政友会と立憲国民党は藩閥政治を打破しようとするが、立憲国民党には以前から内部対立があった。憲政本党当時から表面化していた、大石正巳、武富時敏、箕浦勝人らの改革派と、犬養毅の率いる非改革派との対立を抱えていたのである。改革派は桂太郎内閣の総辞職後、立憲同志会に参加している。

ここで『虱』へ目を転じ、本作に用意されている〈構図〉について、第一次護

憲運動との関わりからさらに説明を加えたい。もう一度整理しておくと、論者は『虱』が佃組（＝立憲国民党）の内部分裂を描くものであるとみる。船内の人々の口論から刃傷沙汰への発展をもって、第一次護憲運動の時の立憲国民党の対立から分裂までを示していると考える。

先に「佃組の船には白幟、山岸組の船には赤幟が立つてゐる」について、2 艘の船がライバル関係であることを示すのではないかと述べた。これは立憲政友会と立憲国民党という 2 つの政党がライバル関係であることと符合する。

佃組の森は、虱を駆除するのではなく飼うと述べた。森の考えでは、虱を飼うことには利益がある。これについて、森を政党政治家、虱を藩閥政治家やその影響力として捉えると、森の意見は〈政党政治家であっても、藩閥政府との妥協を図ることは、自分たちにとって利益がある〉という意見と重なる。

一方で、佃組の井上は虱を食べていた。これは他の藩士のようにただ虱を排除する姿勢とは異なっている。井上は、虱を排除する過程で、それを食べて自分の栄養にしているのである。この行為は、〈政党政治家による、藩閥政府との持ちつ持たれつの関係〉を意味する。排除を行いながらも同時にその存在を利用しているのである。作中、井上に加担した反森の人々は、虱から恩恵を受けることはないし、道徳的観点からしても虱を体に飼うのは良くないという意見を持っていた。これは〈藩閥政治家の影響力を政党から排除すべきだし、政党に関係している藩閥政治家から恩恵を受けるのは良くない〉という意見と対応するが、ここで見落としてはならないのは、井上がその大義名分の中にいる存在だということである。後述するように、この設定は作中で重要な役割を果たしている。

『虱』の〈構図〉を説明したところで、最後に、『虱』を第一次護憲運動との関わりから捉えることができると主張する立場からみた場合、一編が一体何を表現していると読めるかについて述べたい。次の森の発言に着目する。

> これ、この船中に、一人として虱の恩を蒙らぬ者がござるか。その虱を取つて食ふなどとは、恩を仇でかへすのも同前ぢや。

「この船中に、一人として虱の恩を蒙らぬ者がござるか」という森の発言は、

船の中の状況とずれた、妙な発言である。なぜかというと、虱を排除しようとして狩っている人々も含めて「虱の恩を受けている」というからである。しかし、この森の発言を第一次護憲運動との関わりから捉える場合、これは決して妙な発言とはいえない。虱が藩閥政治家や藩閥政治家の影響力を指し、船中の人が政党政治家を指すと考えると、森の発言は、〈政治家の中で藩閥政治家からの恩恵を受けていない者は皆無だ〉という意味となる。第一次護憲運動との関わりから作品を捉えていく立場からすると、この森の発言は政治家に対する一つの意見であるとみることができる。

これに対し、虱を食べている井上は、森に向かって「身共は、虱の恩を着た覚えなどは、毛頭ござらぬ」と述べる。つまり〈自分は藩閥政治家からの恩恵を受けていない〉と言い張る。しかし、そうではないのだ。井上的な立場を取る政治家は政党政治を目指す活動の中で、藩閥政治家という存在を必要とし、持ちつ持たれつの関係を築いている。表向きとは異なり、藩閥政治家を利用するのである。

森の方は最後まで虱に対する立場を変えない。「いや、たとひ恩を着ぬにもせよ、妄に生類の命を断つなどゝは、言語道断でござらう」と述べる。これは、〈藩閥政治家を切り捨てるのはやりすぎである、藩閥政治家を根絶することには反対する〉という意見と対応するものである。

そろそろまとめに入っていくが、『虱』には、森と井上の争いをもって、2 人は結局同じ穴のムジナではないかという見方が提示されている可能性がある。虱と持ちつ持たれつの関係でやっている井上と、虱を生かせという森が互いに罵り合う姿は、同じ穴のムジナである政治家同士の同族嫌悪的な争いに他ならない。『虱』はそれを痛烈に批判していると受け取ることができるのである。

日本では当時、国政の運営のためには、藩閥政治家は政党の協力を得ながら内閣を組織していく以外に方法はなかったという。しかし、そうなると政党の意向に振り回されることになる。そこで藩閥政治家は自らが総裁として政党を組織し、それによって政党を統制しようとした。こうして藩閥政治家は政党と深く関わる。一方で、政党政治家も、藩閥政治家の力を利用していた。藩閥政治から政党政治への移行を目指した第一次護憲運動も、結局は政治家の利益が目的であっ

たに過ぎず、民衆のためのものにはなっていない。第三次桂内閣の退陣後、薩摩出身で海軍大将の山本権兵衛が立憲政友会を与党として首相となった。民衆の多くは政党内閣の成立を期待していたので、これに対して失望した。そしてドイツのジーメンス社が行った日本海軍高官への贈賄事件、いわゆるジーメンス事件で山本内閣は倒れ、元老井上馨の斡旋によって、1914 年 4 月 16 日、第二次大隈重信内閣が成立する。大正政変後も藩閥政治は続いていったとみることができる。『虱』はそのような状況を受けて、自己保身しか考えていない政治家を批判する内容を持つものとして読めるように仕立てられているのではないか。

4. 表現上の対応

ここまで、作中に用意されている〈構図〉に着目してきたが、この章では細部にも目を向けることで、本作が第一次護憲運動を取り上げている可能性についてさらに述べていく。本文に使用される言葉の中で、不自然な箇所に着目したい。

> それも、五匹や十匹なら、どうにでも、せいとうのしやうがあるが、前にも云つた通り、白胡摩をふり撒いたやうに、沢山ゐるのだから、とても、とりつくすなどと云ふ事が出来る筈のものではない。

この箇所にある「せいとうのしやうがあるが」の表記は不自然であるとしかいいようがない。「せいとう」は、一見すると「長州征討」と「虱の征討」をかけているようにみえる。しかし、その場合、ひらがな表記である必要はない。実は、「せいとう」は「征討」と「政党」がかかっており、この作品が政治の政党をテーマとして隠し持つことをほのめかしているのではないだろうか。『虱』の中では、「せいとう」の 1 箇所のみが不自然にひらがなの表記となっている。この見方から「せいとうのしやうがあるが」の箇所について考えてみると、引用の箇所は〈虱が 5 匹や 10 匹なら征討できるが〉という意味とともに〈藩閥政治家が 5 名や 10 名なら、政党として手の打ちようがあるが〉を意味していると受け取ることができる。また、次の箇所にも着目する。

体中、金銭斑々とでも形容したらよからうと思ふ程、所まだらに赤くなつてゐる。

ここでは、体を虱に食われ、かきむしって体が赤くなっている様子を「金銭斑々」としている。「金銭斑々」は、銭の形のようなまだら模様を意味するのであるが、この文字は、金まみれ、金権政治を連想させるものとなっている。これもまた、本作が政治を話題にしていることを暗示しているのではないだろうか。これらを踏まえ、最後に語り手の意見が挿入される箇所にも着目したい。

大きな帆に内海の冬の日をうけた金毘羅船の中で、三十何人かの侍が、湯もじ一つに茶呑茶碗を持つて、帆綱の下、錨の陰と、一生懸命に虱ばかり、さがして歩いた時の事を想像すると、今日では誰しも滑稽だと云ふ感じが先に立つ。が、『必要』の前に、一切の事が真面目になるのは、維新以前と雖も、今と別に変りはない。

このような語られ方は、芥川の小説において決して珍しいことではないが、本作の場合、傍線部の箇所は、藩閥政治を倒すための政党政治家の身辺整理についていっているようにもみえるのである。

5. おわりに

本論では、芥川にとって初期の作品に位置する『虱』を取り上げた。『虱』には、設定や表記に不自然な点がある。それらへの着目を通して一編の分析を行った。

不自然な点として挙げたのは、史実とは異なり、『虱』には長州征伐で使用された軍艦「発機丸」が登場せず、金毘羅船 2 艘だけが登場することである。そこから、本作が 2 組のうち 1 組が 2 グループに分裂するという〈構図〉を必要としたことを指摘した。1914 年に東京で大流行した発疹チフスが、虱を原因としたことから、虱というモチーフが同時代を強く意識させるものであったことについて指摘し、『虱』が第一次護憲運動を取り上げていること、特に、立憲国民党の

内部分裂を取り上げている可能性について述べた。その文脈で捉えた場合、虱と持ちつ持たれつの関係でやっている井上と、虱を生かせと主張する森が互いに罵り合う姿は、同じ穴のムジナである政治家同士の同族嫌悪的な争いを思わせる。よって本作は、自分たちのことしか考えていない当時の政治家たちを痛烈に批判する内容を持つものとして読める仕掛けを持った作品であると結論付けた。第一次護憲運動では、藩閥政治から政党政治への移行が目指されたが、藩閥政治家は政党と深く関わり、政党政治家もまた藩閥政治家の力を利用していたという状況がある。結局は政治家の利益が優先され、民衆のためのものにはなっていなかった。そうした政治的状況を批判していると受け取れるのである。作中に用いられる「せいとう」「金銭斑々」の語がともに政治を連想させることにも言及した。

『虱』は従来、人間一般を揶揄するものとして、または少々漠然とした形で社会を批判するものとして捉えられてきた。歴史小説『虱』が第一次護憲運動との関係から読むことを許容する作品なのではないかという主張は、芥川の歴史小説の捉え方を見直すための一視点となるかもしれない。大方の研究者の見方を裏切り、芥川の歴史小説は、案外、特定の事件とそれに対する芥川の政治的意見を読み取ることができるように仕立てられている可能性がある。

本論では『虱』を分析した結果を述べたが、これだけではまだ芥川の歴史小説全般について何らかの結論を導き出すことはできないだろう。同じ問題意識から他の作品についても検討していきたい。

注

1)『芥川龍之介全集 第一巻』（岩波書店、1995 年、397 頁）には次のようにある。「一九一六（大正五）年五月発行の「希望」に掲載されたらしいが、初出雑誌は未見である。芥川は、「羅生門の後に」で、「「新思潮」以外の雑誌に寄稿したのは、寧ろ「希望」に掲げられた、「虱」を以て始めとするである。」と書き、「芥川龍之介年譜」の大正五年の項にも「五月雑誌「希望」に「虱」を発表す（中略）。」と記している」。現在、初出雑誌を確認することはできない。本論で使用する全集の底本は単行本『鼻』である。

2）以下、第一次長州征伐については、徳田寿秋『軍艦発機丸と加賀藩の俊傑たち』（北國新聞社、2015 年 47-48 頁・117-118 頁）を参照した。

3）竹内真『芥川龍之介の研究』（大同館書店、1934 年、241 頁）、石割透「「孤独地獄」「父」「酒虫」など―芥川の小品―」『芥川龍之介―初期作品の展開―』（有精堂、1985 年、107 頁）、安藤幸輔「〈川〉にみる短篇小説の方法（二）」（『駒沢短大国文』1994 年 3 月）、関口安義『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房、1999 年、183 頁）など。

4）吉田俊彦『芥川龍之介―『偸盗』への道―』（桜楓社、1987 年、71-78 頁）は末尾の破綻を指摘しつつ、本作が武士道精神、ひいては形式主義的倫理観、価値観への批評精神を持つことを指摘する。

5）山本捨三「「高瀬舟」と「虱」の比較を中心として」（『語文』1954 年 8 月）は「内容的に大正初年の社会問題生活問題に対する批判を寓意した」とする。酒井英行『芥川龍之介 作品（テキスト）の迷路（ラビリンス）』（有精堂出版、1993 年、37-38 頁）は「『虱』の諷刺を、幕末の日本のみに限定する必要はないであろう。芥川の創作意図は、むしろ、明治時代の文明開化の風潮への諷刺にあったかも知れない。いずれにしろ、『虱』は、西洋（文明）と関わる日本人の関わり方を諷刺した作品である」とする。佐々木啓「芥川龍之介「虱」小考」（『北見大学論集』2002 年 2 月）は「明治時代を支えてきた思想、つまりは旧時代への思想的距離の宣言」を内容とすると論じる。

6）鷲﨑秀一「芥川龍之介「虱」論―加賀藩の長州征伐と喜劇活動写真の流行から」（『阪南論集人文自然科学編』2017 年 10 月）は「虱」のユーモアに活動写真との関係をみる論考である。そこでは論者のように作品を捉える立場が否定されていることを紹介しておきたい。

7）「校正の后に」『新思潮』1916 年 11 月（『芥川龍之介全集 第二巻』岩波書店、1995、32 頁）を参照。

8）鷲﨑秀一、前掲論文

9）前田育徳会（編）『加賀藩史料 藩末篇下巻』（広瀬豊作、1958 年、239 頁）

10）鷲﨑秀一（前掲論文）が、石川県『石川県史 第二編』（1928）の記述を注に引用する中に、「七日には連恭も亦藩有の汽船発機丸に搭乗せり」とある。そのように鷲﨑もまた発機丸のことが書かれている文章を参照するが、鷲﨑は発機丸のことに触れていない。

11）田畑勉「加賀藩の洋式軍艦“発機丸”について―その購入と航海をめぐり」（『金沢星稜大学論集』2007 年 3 月）
12）徳田寿秋、前掲書、48-49 頁
13）前田育徳会（編）、前掲書、239 頁
14）徳田寿秋、前掲書、48-49 頁
15）渡部幹夫「大正三年 , 東京における発疹チフスの大流行について　防疫行政面からの一考察」（『日本医史学雑誌』2002 年 12 月）
16）第一次護憲運動については、成田龍一『大正デモクラシー』（岩波書店、2007 年、20-25 頁）、小林惟司『犬養毅―党派に殉ぜず、国家に殉ず―』（ミネルヴァ書房、2009 年、55-56 頁）にくわしい。第一次護憲運動について述べる箇所はこれらを参照した。第三次桂内閣組閣後の、立憲同志会結党宣言や総辞職について、小林道彦は次のように述べる。「桂は世論の批判をかわすためにあえて政党組織に踏み切った。（大正二年、立憲同志会結党宣言）。しかしながら、こうした小手先の政治的彌縫策に人々が惑わされることはなかった。帝国議会は「憲政擁護、閥族打破」を呼号する群衆に取り囲まれ、ついに桂は内閣総辞職を余儀なくされる。民衆運動（いわゆる第一次憲政擁護運動）が閥族内閣を実力で打倒したのである」（小林道彦『桂太郎―予が生命は政治である―』ミネルヴァ書房、2006 年、273 頁）

＊『虱』の引用は『芥川龍之介全集 第一巻』（岩波書店、1995 年）に拠った。ただし漢字は適宜通行の字体に改め、圏点やルビは省いた。傍線は全て論者の付したものである。

〈キーワード〉 芥川龍之介 『虱』 歴史小説　長州征伐　第一次護憲運動

Discussion of Ryunosuke Akutagawa's *Shirami*: A Critique of the Politicians of Its Era

MIZUNO Akiko

This paper explores the possibility that Ryunosuke Akutagawa's *Shirami* serves as an allegorical expression of his political viewpoints. The historical novel strategically excludes the appearance of the Hakki Maru warship from the Choshu Expedition, focusing on two Konpira ships instead. This deliberate omission serves to depict a scenario where one of the two factions experiences internal discord. Notably, the novel subtly references the First Constitutional Protection Movement that occurred three years before it was written, particularly alluding to the internal strife within the Constitutional National Party during that movement. The movement aimed to shift from domain-centric to party-based politics, yet the personal interests of politicians superseded the public's welfare during this transformative period. By implying a resemblance between the characters Mori and Inoue, the novel vehemently critiques the politicians of its era. The analysis suggests that Akutagawa's political perspectives may extend to his other historical novels.